

年間第 23 主日 2019.9.8

従う者に要求される福音の感性

ルカ14章 25-33節

(そのとき、) 大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

説教

「自分を憎みなさい、自分を捨てなさい」そうでなければ私の弟子ではない。これがきょうの福音のテーマです。なんともひどい話だなあと感じるのはふつうの感覚です。

あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。申命記 4:2

これはモーセが十戒に対する勧告として民に伝えていることばです。十戒に対して、なにも加えてはならない、減らしてもならない、そのまま受け入れなさいと勧告しています。続いて十戒をつたえ最後に 6 章で有名なシェマー

(申命記 6:4-5 の冒頭の聞けのヘブライ語読み) を伝えています。

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。 申命記 6:4-5

イスラエルの民をエジプトから導き出したモーセが神から授かった十戒に変更を加えるな、主を愛しなさいが、いわば旧約の感性です。この感性はそのまま新約にも引き継がれます。福音になにか加えてはならない、そして減らしてもいけません。「自分を憎みなさい、自分を捨てなさい」に関しても読まないふりをする、十字架を背負ってついて来る者と比喩的に読み替えることなどせずにストレートにそのまま受け入れる感性が求められます。極端に言えばイエスさまが白といえばシロ、黒でもシロ。行けと言われればどんなに危険でも行くということです。でもわたしたちには自意識がありますからなんか変だな、おかしいぞと感ずることもあるわけです。そう感じた時、目をつむっていわれたとおりにすればいいのか、というとそうでもありません。本田哲郎神父訳新約聖書から引用して「従う者に要求される福音の感性」をタイトルにしました。素のまま自分の感性だけではなくイエスに従う者としての感性を磨くことが大切です。

ところで、ルカの14章はきょうの朗読箇所にあと2節続いておしまいになります。

確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか。畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。聞く耳のある者は聞きなさい。 ルカ 14:34-35

福音の内容にはなんのつながりもないように唐突に「地の塩」(マタイ 5 章、マルコ 9 章に平行箇所あり) が続きます。でも塩を福音と読み替えたり、福音を受けとめるころとしたり、塩気を感性と読み替えてみるとルカ 14 章の文脈での意味が浮かび上がってくるように思います。

確かに福音は良いものだ。だが、福音も受けとめる感性がなくなれば、福音は何によつて味が付けられようか。役立たず、外に投げ捨てられるだけだ。

一人ひとりが福音の感性を受け入れることができますように。
